て遊ぼやないか。」
「もうし、そんな大仰な事して……。」
「良えや無いかいナ、偶時の事や。店の者にかて一遍位愉快な目をさしたりイな。自分さい良かつたら他はどうでもかめへんてな事俺いは嫌ひや。」
「ヘエ、まあ成る可くお靜かに……。」
「解つてるちうのに。お前も圖々しい割に氣が弱んなア。おい。店の者、みな今日は鳥渡譯が有て早仕舞や、番頭も承知して呉れてる。さア仕舞ふてや。」
お店では譯が解りまへんが悪い話や無いさかい、不足云ふ者はごわへん。開ける時は時間要りよるが、閉める時の早い事。バラバツタ〳〵〳〵〳〵。
「ヘエ、閉めました。」
「やあ御苦勞はん〳〵。先刻も云ふた通り少し譯が有つてナ。今晩は一つ皆で面白う遊んで貰はうと思ふのや。でまア何ぞ御馳走をして上げ様と思ふねが、これ丈け大勢やちウと中には好き嫌ひが違ふやろと思ふのや。そこで各自が好きな物を注文して、遠慮無しに遣つて貰ひたいと斯う思ふのやが、順々に訊いて書けるさかい皆注文してや。番頭お前は何が良え。」
「イヤ恐れ入ります。私はモウ……。」

「そんな事云ひないナ。好きな物があるやろ。何や。」
「いえ、ほんまに、何でも結構でごわす。」
「お前がそんな事云ふたら、他の者が遠慮せんならんがナ。なんなと、好きな物を注文して遣りいな」
「あゝ左様でヘエ。……左様なら厚顔しうムりますけど、チョツと洗身か水貝でも……。」
「それ見いナ、贅澤な物知てるのやがナ。諾し〳〵。番頭が洗身に水貝——と。次は源助。何や。」
「えー。蓮根の天婦羅で……。」
「しようむ無い物が好きやなア。諾し〳〵。源助が蓮根の天婦羅。車海老も附けといて貰ふたる。徳藏お前は……。」
「鯛の鹽燒で。」
「本膳やがナ。諾し〳〵。次は佐七や。お前は……。」
「鮪の照燒で……」
「ウワー。脂濃い物喰ふのやなア。鮪の照燒か。次は藤助、何が好きや。」
「ヘエ。そんなら餡卷きをどうぞ……。」
「何、餡卷きやア。アハハハハ。ほんにお前は甘黨やつたなア。併し何ぼ何でもお膳に餡卷きのせてるのやなんて感心せんで。栗のきんとんで辛抱しとき。えゝか。藤助きんとんと……それから次は。